

# 日本語文章における要約と自動索引

——保田與重郎『日本の文學史』から——

谷口敏夫

## はじめに

文章を読んでいるときに、文や段落を切り抜いたり下線を引いたり、あるいは付箋をつけたり書き込みをしたり、さまざまな工夫を凝らすものである。そういうことをする目的にはいろいろあるだろうが、その中の一つになんらかの知識を、読んでいる本のなかから抽出しておくということがあるに違いない。そのときそのとき、知識の断片にたいして要約したりするのが面倒だから下線をひく、あるいは単に注意を喚起するために付箋だけをつけておく、あるいは、人により時により、詳しい批判や感想や要約などのメモを書き付けることもある。私などはもしよくできた索引が巻末にあれば、索引語自身にマークを付けてすませることもある。こう言うことがたび重なると、ある程度自動的に必要なところを抽出できるような仕組みが必要と思うようになる。しかし要約の自動化は難しい面も残っており、当初はテキストの重要な抜き書きを自動的にできるような方法を考えなければならないであろう。

ここでの目的は人手による基準となるような要約を作り、それと自動索引の結果を比較評価し、自動抄録や今後の自動要約の研究のための基礎資料を整備することにある。人手による要約のゆれや、要約と自動索引とテキスト本体を比較しておくことにより、一つの物差しを作ることができれば、様々な自動処理がより客観的に評価できるようになるであろう。

## 1章 要 約

「要約」に近い言葉として「抄録」がある。一般的な辞書による説明では抄録は「抜き書き」という意味を持っている。だが情報学や図書館学での抄録という言葉はある程度定義が明瞭に定まってお<sup>(1)</sup>り、一般的な抜き書きとは様相が異なる。しかしここでは、抄録と要約との関係を、抄録とはテキストそのものから文ないし段落を抽出し内容を簡潔に圧縮したものとし、要約はテキストそのものの引用などは含むにしても、あるいは内容を簡潔に圧縮したものということでは抄録と同じものであるが、一応テキストからは独立した完全な文章であるものと定め<sup>(2)</sup>る。

そのような要約を自動的に作成する事例はあるが文学にそのまま適用させるには困難であるので、本稿ではまず人手による要約を行<sup>(3)(4)</sup>ってみた。試みに被験者（以後要約者とする）一名に本稿で用いた『日本の文學史』<sup>(5)</sup>の要約を依頼した。期間は三週間で条件は以下の通りである。

- (1) 全24章を各章ごとに200字に要約する。最後に全体を400字にまとめる。
- (2) 要約とは各章の内容を客観的にまとめるものとする。要約者自身の批判や感想ではなく、内容そのものを主におく。
- (3) 作品からの大切と思われる引用だけでもよい。引用と自分の文章を混合してもよい。（注：要約者に抄録と要約の区別は伝えなかった）

依頼した内容は期限、文字数、と「客観的な要約」を中心としたものであり、「要約」という言葉は厳密には伝えなかった。ただ次のような説明だけは補足した。「一冊の本を各章ごとに、人間がまとめたものと、コンピュータがまとめたものとを、比較することが目的です。作者の文をそのまま抽出してもよいし、自分で言い換え（パラフレーズ）てもよいです。両者を適当に併せるのがやりやすいのではないのでしょうか」。完成した要約文を付録にあげたが、結果的に要約者は「文の抽出」に加えてそれを自分の言葉で客観的にまとめたものとした。これは、一般的な「まとめ」の姿であると考えられる。要約者については、平成7年3月に光華女子大学日本文学科を卒業した社会人である。

このような実験は他の諸科学とは異なり、客観性の維持が非常に困難である。その上、保田與重郎という比較的難解な思想家であり、晦渋な文章をもつ特異な文学を、短期間で読み要約するという作業は想像以上に難しいことであった。しかも、客観性を保つたために対象に専念できる期間をできるだけ短期間とし、また保田を読んでいない、いわゆる「保田文学」に対しては素人の人物を選定しなければならなかった。客観的主観的という前提の前に、このような実験自体の困難性があったといえよう。結果として、要約作業は精神的な負担が重いものであるが、期限通りにほぼ満足のいく要約が手に入った。

## 2章 評 価

ここでは掲載した要約文の簡単な特色と、同時に作られた自動索引<sup>(6)</sup>による全体頻度20以上（各章頻度6以上）の索引語を人名と作品とに絞って概説する。

### 1. 要約文

テキストが明瞭なところは、要約文もわかりやすい。「十三. 遠島御歌合」などが該当する。「十一. 文学の道」などテキスト自体が現代人にとって難解なところは、要約文もわかりにくい。このようなゆれは自明のことであるが、記しておく。

人手による要約は機械的に規則を設けて行うことが困難な場合が多い。今回のような文学の場合にはそれが顕著である。分野によっては論文の内容把握に、どんな薬品を用いて、どんな合成物ができたのか、などのようにある程度規則を設けることもできるが、文学は規則通りに書かれることが少ない。それが著者の特徴となるのだから、要約をまず規則作りから始めるのは困難であると推量した。しかし、要約者の作業結果からいくつかの要約手法を読みとることも可能となった。

たとえば、要約者はまず一番大切と思われる文を選び、それを冒頭におき、それから飛び飛びに引用文を選び、文章化している。一章分の内容が多岐にわたるときは、前部と後部とに要約文を分けている。著名な文人や作品が多数列

伝風に描かれている章では、その対象を一々列挙せずに、より抽象化した文を抽出し、まとめも高次俯瞰的に行っている。俯瞰的なまとめ方は、章が進むにつれて、すなわち要約者がテキストに習熟するにしたがって多く用いられるようになる。この手法は極めて人間的なすなわち高度な方法ではあるが、過ぎると具体性にとぼしい要約文になる場合もある。

今回の要約文については、最後の全体に対する要約が優れた結果をもたらしたので、各章におけるゆれはゆれとして、高い精度の要約文であったと判定している。

## 2. 索引語人名

全体から自動抽出した索引語のうち頻度が20以上のものを付録末尾の全体要約部に収めた。これにより、まず理解が容易な人名で見ると、芭蕉 (91)、定家 (39)、宣長 (38)、貞徳 (34)、日本武尊 (33)、貫之 (32)、後鳥羽院 (32)、契沖 (26)、家持 (21)、光平 (21)、親房卿 (20)、蕪村 (20) と12名があげられてくる。このうち保田の単行本としてこれら人物に関連する著作を見ると、『芭蕉』『戴冠詩人の御一人者 (日本武尊)』『後鳥羽院』『万葉集の精神 (家持)』『南山踏雲録 (伴林光平)』などがある。これらの著作は代表的なものと考えてよく、保田にとっての「日本の文学史」はほぼこの著作に照応する文人詩人思想家の営為そのものを描くことにつきることであったと言っても過言ではない。このうち、日本武尊は一般的な考え方からすると異質に見られるが、行為者としての日本武尊を詩人と考える立場にたつ保田の考え方からみると、高頻度に使用されていてもおかしくはない。思想家としての北畠親房や幕末の伴林光平も行為そのものが詩であるという考えのもとに、高頻度をもたらしたと考えられる。

この索引から人名を見て、二つの事実をあらためて認識した。ひとつは、保田自身に対する研究史から考えると意外なのであるが、序章での親房についての深い取り扱いから見て、硬直した思想家と見られている親房自身の復権をはかる意趣がよく伺えるということである。もう一つは、松永貞徳と蕪村が比較

的高頻度に使用されている事実に気付いたことである。14名のうち3名までが俳諧関係者であることは、芭蕉という特出した頻度をもつ人物に引かれての結果なのか、他に理由があるのかは文学の問題として興味がわくが、それ以上の解釈は本稿の枠を越える。ただ言い添えると芭蕉が他の人名の倍以上の頻度をもつことからみて、古代に古事記、万葉集をそえ、中世に新古今集を置いた保田の考えによる日本文学は、それを近世において一介の俳諧師すなわち市井の人芭蕉が継承の中継点となり近代に続く。そういう考えの凝縮が高頻度をもたらしたとも考えられる。

### 3. 索引語作品名

作品名としては、万葉集 (110)、源氏物語 (39)、古事記 (35)、太平記 (35)、新古今 (24)、古今集 (23) (「古今序」と合わせると34)、平家物語 (20) の7点が高頻度の現れかたを見せている。先の人名と関連づけたその他の作品名としては、北畠親房『神皇正統記』が12の頻度をもっている。芭蕉『奥の細道』(12)、宣長『古事記伝』(4)、契沖『万葉集代匠記』(4)と、『奥の細道』『神皇正統記』以外は目立った使用がない。

作品名としての万葉集は他の作品の三倍になる。保田の著作として万葉集については『万葉集の精神』『万葉集名歌選釈』『わが万葉集』があり、さらに私歌集『木丹木母集』があることからみて、このテキストあるいは保田自身のテーマは万葉集に収斂するのではないかという推量が可能となるような高頻度である。鹿持雅澄 (14)『万葉集古義』(7)への言及とあわせて自動索引の結果がある程度実状にそうものであるという考えの例証となるであろう。

特徴として、『太平記』『平家物語』が高頻度で現れていることが見られる。太平記では後醍醐天皇、楠正成、足利尊氏、北畠親房のうち、北畠親房への言及が中心をなしている。また両作品は、平家物語と民衆、太平記と文人、という関係性のなかでとらえられている。

#### 4. ま と め

一冊の図書に対する要約は人間にもコンピュータにも難しいことである。本稿では人手による要約と自動索引による索引語を並べて比較した。その結果を十分に検討するまでには至らなかったが、人手によるモデルがあることにより、今後は自動索引、自動抄録などの実験がより精密になるものと考ええる。

#### 謝 辞

平成七年の酷暑の中でデータ整理や要約に貴重な力を貸して下さった、石原由美子、上根由美、川崎淳子（要約を含む）、小林尚美、小堀淳子、杉本あかね、谷口るり。以上七名の諸氏に深甚な謝意をここに記します。

また本稿は「文部省科学研究費『目次の構造と索引等を利用した日本語文献のハイパーテキスト化による高次検索システム』一般研究（C）課題06680385」に一部関わるものである。記して感謝する。

#### 文 献 注

- (1) 『情報管理論／柴田正美』教育史料出版会，1990。
- (2) 「筆者の主張に基づく日本語文章の構造化／福本淳一」自然言語処理 78-15, 1990。pp 113-112。
- (3) 「文章内構造を複合的に利用した論説文要約システム GREEN／山本和英他」自然言語処理 99-3, 1994。pp 17-24。
- (4) 『運用Ⅱ・人文系研究のための言語データ処理入門／水谷静夫編』（朝倉日本語講座；6）朝倉書店，1983。「第1章 抄録のための言語処理／田中章夫」
- (5) 『日本の文学史／保田與重郎』新潮社，昭和四十七年
- (6) 「日本語文章における自動索引の試み—保田與重郎における専門用語の考察をふまえて—／谷口敏夫」光華女子大学研究紀要 32, 1994。pp 43-63。

## 付録『日本の文學史』内容解題（要約）と自動索引

### 1. テキスト

テキストは保田與重郎『日本の文學史』新潮社、昭和47年初版を基にした。各章と目次内容を以下に記す。なお、章番号はテキストにはない。

- |             |              |               |
|-------------|--------------|---------------|
| (01) 序説     | (10) 日記と物語   | (19) 深層の文学    |
| (02) 神話     | (11) 文学の道    | (20) 国学の恢弘    |
| (03) 神詠     | (12) 新古今和歌集  | (21) 文芸の新しさ   |
| (04) 日本武尊   | (13) 遠鳥御歌合   | (22) 志士文学     |
| (05) 神を祭る文学 | (14) しきしまのみち | (23) 文明開化の超克  |
| (06) 万葉集の濫觴 | (15) 古典のまなび  | (24) 日本の文学の未来 |
| (07) 万葉集の成立 | (16) 南朝の文学   | 後記            |
| (08) 都うつり   | (17) 乱世の態度   |               |
| (09) 勅撰和歌集  | (18) 乱世の文人   |               |

各章は、本稿では扱わない後記を別にして、400字原稿で平均30枚超である。頁面を基にした総原稿量は約750枚となる。ファイル容量では約530Kバイトであり、これは実質原稿約660枚となる。

本文は旧字旧仮名遣いである。旧仮名遣いはそのままにし、旧字の殆どは現代用字にあらためた。

### 2. 要約と解説と索引語

各章内容を要約、解説、索引語の三つの構成にまとめた。「要約」は要約者一名により三週間でまとめられたものである。表記と引用の訂正以外には提出されたままを掲載した。各章ともに200字を原則とした。「解説」は私自身による、要約文とテキストに対する評価を含む説明である。各末尾には自動索引に現れた索引語との関連を記した。「索引語」は各章単位で、頻度が6以上の用語を抽出したものである。二重下線は要約文に現れた私の判定による重要語を表し、下線は要約文には現れないが、テキスト内容から考えて重要語としたものである。ただし二重下線を優先とするので、両者の重なりは考えない。また、

最後の著作全体に対する解題においては、源氏物語 39, 定家 39, のように作品と人名とが分明なようにマークを付けた。右端数字は出現頻度である。

### 3. 解 題

#### 一. 序 説

##### 要 約

序説では、著者の旧著である「美術史」からの経緯や「歴史」に対しての著者自身の考え方を示すことで執筆動機を、また近世国学の基礎であると著者のいう「朝廷の風儀」や「後鳥羽院以後の隠遁詩人の志」等の言葉を使って著述上の立場を、そして「近世を旨として、文人の志の系譜をたどりたい」という執筆の目的をと、筆者の執筆に関する動機・立場・目的の三つの点が述べられている。

##### 解 説

序説から「朝廷の風儀」「後鳥羽院以後の隠遁詩人の志」「近世を旨として、文人の志の系譜をたどりたい」の各文を要約者が抽出しているのは評価できる。これは保田の主著である『後鳥羽院』からも検証できる。近世は芭蕉を指すと考えて良い。しかし索引語には {後鳥羽院, 隠遁詩人} がまだ高頻度ではない。また「美術史」の抽出は著作『日本の美術史』の後にテキストが書かれ、その経緯に著者が深く意味づけを与えている事実からみて、妥当である。まとめとして、「動機・立場・目的の三つ」というように記しているのが人間の行う要約文の優れたところである。自動抄録・要約ではこの水準にまでまとめるのは困難であろう。

要約文の重要語のうち「後鳥羽院」「隠遁詩人」が自動索引にはあらわれていない。これは章という局地的な頻度判定だけでは十全な結果が得られない証左である。

索 引 語 01. 序説 (19: 頻度 6 以上の異なり語数)

私	65	<u>歴史</u>	15	日本	13
---	----	-----------	----	----	----



美術史	11	<u>風儀</u>	8	空	6
国	9	<u>近世</u>	7	思想	6
書	9	考へ方	7	状態	6
心	9	世界	7	方法	6
思ひ	8	むかし	6		
<u>朝廷</u>	8	わが国	6		

## 二. 神話

### 要約

神話では、文学もはじめは「みな声の伝へ」であったとし、古事記を引用し、「神話は通念としての文学にくらべて、遙かに尊い異質といつてもよい『文学』であり、如何なる音楽よりも無限雄大な音楽」であるとした。また、筆者の文学史とは「古の王朝を一貫してきた文芸の道と、それをうけつぐだけを悲願とした代々の文人の流れがあつた」、「それを云ふだけで、わが生き甲斐ともなるほどの、きらめくやうな人の心と志の歴史である」となる。

### 解説

この章は古事記本文が多数引用されており、要約が困難なところである。文芸の道というものを想定し、それを継承してきた各時代の文人について語ること自体が、文学史（歴史）であるという考え方は、この要約文だけでは細部まで理解するのは困難である。また要約文には自動索引の結果が多数含まれており、要約文が本文に直接そった形式、すなわち抄録に近い形式で行われていることが推察できる。

要約文の重要語「声の伝へ」が自動索引に現れていない。これは、「の」格助詞の扱いが利用した自動索引システム内で機能していないからである。

### 索引語 02. 神話 (20)

神	27	ことば	17	古	12
文学	22	<u>古事記</u>	17	伝へ	12
歴史	19	国	16	私	11

<u>神話</u>	9	古典	7	<u>音楽</u>	6
わが国	8	中心	7	建物	6
時代	8	物語	7	心	6
声	8	意味	6		

### 三. 神 詠

#### 要 約

「日本文学の志といふものを、神慮といふ畏怖と過激のことばをかりて、改めてここで今生の願ひとしてしかとたしかめておく」とした著者は、「『天御柱』と『天石屋戸開』の時の二つの詩歌の意」である神詠に始まった文学が、「我執の水面をかり渡つてゆくところに、日本文学の念々と文人の志」を見つけたと言う。またそこに神と人のけぢめがつけられていく過程を見る。

#### 解 説

神詠（神が詠んだ歌）から日本文学が始まり、神と人とのけじめ（分離）によって人の文学が生まれ、それを代々継承してきた、という想定が始まりが要約されている。しかしこの要約では、テキストを熟知していない限りは、大意すらつかむことはできない。「神と人のけぢめ」という概念の内実を背景に持たずしては、理解困難な章であるといえよう。この章のテキスト要約は、一般的には人手であっても無理があると結論づけてもよいであろう。

要約文の重要語のうち「神慮」「天御柱」が自動索引に現れていない。

#### 索 引 語 03. 神詠 (31)

神	27	志	10	考証	7
歌	22	日本文学	10	思ひ	7
私	21	わが国	8	詩	7
文学	14	神話	8	<u>神と人</u>	7
ことば	13	日本武尊	8	声	7
<u>神詠</u>	12	まこと	7	調	7
風景	11	皇子	7	<u>天石屋戸開</u>	7

伝へ	7	観念	6	天	6
美	7	古	6	天上	6
<u>幽契</u>	<u>7</u>	心	6		
開闢	6	大装衣	6		

#### 四. 日本武尊

##### 要約

著者は日本武尊の詩歌を「神の天造の詩歌でなく、人が今世今生に思ふ述志に即した文芸の世界のもの」として「人の世に於ける文学の第一章に日本武尊を拝」し、その年代を考証する。また日本武尊が楊貴妃に変貌転生される話から、「無や妄から実が生れる時、その発想や連想、その物語をつくりあげてゆくはたらきには、一つの民衆の思ひが」あり、そこに一番素朴な文学の発想法があるとした。

##### 解説

日本武尊の歌と生涯がすなわち、神ではなくて人の文学の始まりであるとあり、また要約後段では民衆の思いが文学の発想法であるとしている。この両者から、日本武尊の詩歌 > 人の文学 > 民衆の思い > 文学の基本、となることがわかる。すなわち文学は民衆の思いであったという図式が現れる。神代の世界を語りながらも、文学の根底が「民衆の思ひ」であると保田が記しているのは重要なことである。しかし、要約の対象が神とも人ともつかない日本武尊であり、その少ない片歌をもとに人の文学の始まりとするこの章も、理解が困難な章であるといえる。

要約文の重要語は自動索引にも現れている。

##### 索引語 04. 日本武尊 (30)

神	20	物語	19	美	14
文学	20	国	18	<u>詩歌</u>	<u>12</u>
皇子	19	私	18	時代	11
<u>日本武尊</u>	<u>19</u>	わが国	15	神話	11

無	10	意味	7	記録	6
死	9	思ひ	7	心	6
天降	9	少女	7	政治	6
日本	9	倭姫命	7	朝廷	6
熱田	9	しるし	6	伝承	6
民衆	8	英雄	6	楊貴妃	6

## 五. 神を祭る文学

### 要 約

「祈ることと祭ることには区別があつた」という書き出し通り、「私事の願望による」祈りと「神と人との納得しあふためのことば」の祝詞との違いや、祝詞が「神を祭る文学の原態である」ことを説明し、「その主要面で神を祭る民衆の文学だつた」風土記を用いて祝詞・祭り・民衆の係わりを述べ、文学は神を祭ることから発生し、祭りの必須条件の祝詞は善言美辞を旨とする意趣を文学の心とした。

### 解 説

適切な要約である。テキストでは、風土記、祝詞、風土記、祝詞の順に記されている。祝詞については鈴木重胤『祝詞講義』への言及が章末尾にある。索引語からみても、祝詞と風土記はそれぞれ高頻度である。特に祝詞は「祝詞式」とあわせると23の頻度になる。この章は、この事実と要約とテキストの精読からあわせて考えれば、「神を祭る文学＝祝詞」という非常に明快な結果がでる。要約も、それに合している。

要約文の重要語は自動索引に現れている。ただし、要約文に「鈴木重胤」は欠落している。

### 索 引 語 05. 神を祭る文学 (23)

神	42	祝詞	16	わが国	11
文学	38	国	15	時代	11
ことば	23	心	12	歴史	11

私	10	祝詞式	7	地方	6
歌	8	くらし	6	伝承	6
重胤	8	意味	6	日本	6
民族	8	思ひ	6	<u>風土記</u>	6
考へ方	7	死	6		

## 六. 万葉集の濫觴

### 要 約

ここで著者は、「驚異の文明の出現には、必ずかくれた前提の史実の積み重ねがある。「万葉集」の出現に奇蹟を見る如くに驚嘆することも宜しいが、その前提のかくれた悠久感にあふれた前史に感動することが、一層切実で正しい日本の歴史のうへ、その文明の学び方である」と述べ、大和路を紹介することで万葉集の生まれた風景を、下照姫、丹生津姫を語ることで万葉集の大きな幹を明らかにした。

### 解 説

要約の最後が下照姫、丹生津姫、万葉集でくくられているが、前半の明瞭さに比較して劣る。これはテキスト自身に因を持つ。万葉集の詩情の源を飛鳥神奈備におき、そこの栢森と隣の入谷に祭られた下照姫、丹生津姫の来歴が語られているのだが、保田自身「異質の万葉集の味わい方」というように、現代人には要約しがたい側面を持つ。しかし要約が「大和路の紹介」としているところは、この章の要点をつき、これは著作『万葉路、山ノ辺の道』があることにも符合している。

要約文での重要語は自動索引に現れている。ただし金刺宮 (10)、瑞垣宮 (6)、大兵主 (6) の三つは重要語であるが、要約には現れない。紙数制限の故であろうか。

### 索 引 語 06. 万葉集の濫觴 (31)

山	21	神	16	私	15
土地	18	国	15	<u>万葉集</u>	15

飛鳥	14	歴史	9	心	6
美	12	<u>下照姫</u>	8	<u>瑞垣宮</u>	6
風景	12	都	8	<u>大兵主</u>	6
古	11	山人	7	天地	6
時代	11	主神	7	伝へ	6
<u>金刺宮</u>	10	<u>神奈備</u>	7	文学	6
<u>飛鳥神奈備</u>	10	なつかし	6	文明	6
大和	9	思ひ	6		
<u>丹生津姫</u>	9	寺	6		

## 七. 万葉集の成立

### 要 約

万葉集の成立では、自らの「貫くものをふまへつつも、それをさらに明白に立証するかの如き細心と誠実さから、国中にある正しい歌そのものの姿を、ありのままに残された」家持卿のすばらしさを語りながら、無比の文学、万葉集の成立が、「自然、神の性を見きはめて、それに従つた」ものであると同時に、作った人もそういうものを志としていたことを示した。

### 解 説

わかりやすく要約されているが「貫くもの」が曖昧である。従来から『万葉集の精神』を中心とした保田の家持に対する考えを理解するのは難渋する。連綿と継承すべきものを内に抱いた家持故に、万葉集が生まれたと保田は言っているのだが、その継承すべき内実に接したとき、テキストはある種の判断停止を強いてくる。要約しようがないともいえる。

要約文の重要語は自動索引に現れている。ただし要約にはなく、索引に現れた「柿本人麻呂」「壬申の乱」はテキストでは最重要語と判定できる。要約者は、家持を中心としてまとめた故に、それ以外の歌人に言及しなかったと推察できる。ただし、紙数制限もある。

索 引 語 07. 万葉集の成立 (26)

歌	26	時代	11	美	7
<u>万葉集</u>	<u>24</u>	心	10	文芸	7
私	19	<u>人麻呂</u>	<u>10</u>	まこと	6
国	16	ことば	9	歌謡	6
<u>家持</u>	<u>14</u>	古事記	9	御製	6
<u>神</u>	<u>14</u>	詩歌	9	山	6
歴史	14	<u>壬申</u>	<u>8</u>	政治	6
天皇	12	感動	7	表現	6
志	11	自然	7		

## 八. 都うつり

### 要 約

日本の文学を貫道する、海波文芸に対して自主独立といわれる「気質は、菅公鎖国以後の平安朝文芸に於て、その唯美の絶対に到達」したとする。平安初期には、嵯峨平城淳和の三帝にその天賦と愛着があつて漢詩が流行する。「文明文化文芸の中心にして且つ淵源、その裁可者的なものをさへ兼ねていましたといふことが、わが皇室の歴史的眞実である。」つまり天皇が文芸や文明の中心にいたのである。

### 解 説

この章は歴史的には奈良京と平安初期のころの文芸の世界を扱ったものである。前章の家持の後では、テキストには際だった文人と作品が少なく、要約者の難渋も顕著である。要約前半では、菅原道真、漢詩に焦点を当てているが、後半の天皇が文芸文明の中心にいたというところは、この章だけの特徴ではない。しかしテキスト自体には重ねて記されている。

要約文の重要語は、菅公一つが自動索引に現れている。索引語の方からみると「井上内親王」「奈良京」がテキストでの重要性を持つが、「奈良京」がどのような文脈で使用されているかについては、要約し難いものがある。

索 引 語 08. 都うつり (23)

国	13	こころ	7	思ひ	6
時代	11	<u>井上内親王</u>	7	<u>菅公</u>	6
日本	11	皇室	7	美	6
中心	10	私	7	物語	6
歌	8	<u>奈良京</u>	7	文学	6
文芸	8	いはれ	6	文学史	6
文明	8	わが国	6	民族	6
万葉集	8	皇太子	6		

## 九. 勅撰和歌集

### 要 約

文芸は、「人の初心によつてうまれるといふ点で、神と人との通路ないし架橋といふ考へがで」た。この智恵を思想として打ち立てたのが貫之で、「志とか、心といふものが、最もきびしいものとして書かれた」彼の古今集序から、著者は「この心構のきびしさをまづ心にとめ」ることが「文学をよむ初心の心得」とし、「大きい自信と堂々の見識にみちみちたこの文章」を描かせたものが、「勅撰集の心である」と言い切った。

### 解 説

古今（集）序が勅撰集の心であるという結論がでているので、要約文で一定の理解はできる。しかし「心構」「初心」「心」「志」「堂々の見識」これらはすべて、保田あるいは紀貫之の時代の言葉の世界を理解していない限り、正確には把握できない。

要約文の重要語のうち「貫之」と彼の「序」は自動索引に現れている。ちなみに古今集（5）、古今序（8）と頻度がでており、古今集自体よりもその序に観点があることがわかる。

### 索 引 語 09. 勅撰和歌集（26）

<u>貫之</u>	17	日本	12	時代	11
文章	14	私	11	心	11



歌	10	御墓	7	思ひ	6
神	9	日本人	7	思想	6
ことば	8	有智子内親王	7	神道	6
状態	8	漢文学	6	唐国	6
天子	8	国	6	文明	6
文人	8	斎宮	6	万葉集	6
<u>古今序</u>	8	志	6		

## 十. 日記と物語

### 要 約

貫之の歌に対する志が「<sup>カムナガラ</sup>神道の<sup>オノヅカラ</sup>自然に発し」ている点から、「人工は自然のまへで、ものの数とも云へない」とし、近代文学以降、わが国人は「西欧風観照風」に流され、自然を見なくなり美観を失つたと惜しむ。又王朝時代の「物語はただ女のことばの美しさで」「ことばの眞実世界である」として「人間の言葉といふ、天造と人工をかねて極致ともなる美的世界をつくるそのものが、最も美しくうごき出すところをめざして、王朝の文学の求めたところがあった」とする。

### 解 説

この章は要約者にとっての専門に属する分野であり、要約者は「八. 都うつり」とともに最も呻吟した部分である。要約者は、個々の作品や人に焦点を当てず、保田が伝えたかったエッセンスをまとめることに意を注いだ。

要約文の重要語としては {ことば, 物語, 貫之, 自然} が自動索引に現れている。要約文は「美観」と「ことば」に王朝文学の精髓を求めているが、索引語だけを見てもそのような言葉が表す概念全体は見えずに、実際には具体的な {源氏物語, 道長, 和泉式部, 更級日記} などが高頻度で現れている。

### 索 引 語 10. 日記と物語 (38)

時代	24	<u>ことば</u>	14	歌	12
私	16	神	14	<u>日記</u>	12

<u>物語</u>	12	くらし	7	古	6
わが国	11	考へ方	7	<u>更級日記</u>	6
<u>貫之</u>	11	思ひ	7	子孫	6
<u>自然</u>	11	書	7	自身	6
美	11	<u>道長</u>	7	小説	6
文学	11	<u>和泉式部</u>	7	心	6
<u>源氏物語</u>	10	しるし	6	貞徳	6
文明	10	意識	6	日本	6
作者	9	家持	6	仏教	6
世界	9	感情	6	万葉集	6
歴史	8	宮廷	6		

## 十一．文学の道

### 要約

後鳥羽院以降の「わが朝の文学の道は、詩人の志に沈潜する」。芸能二面の根本には、「大いなる生命に醒めてゐる」意での「つつましさと恥を知るといふ心構があり、それが久しい時代にかけて文人詩人の志を、かつがつ支へるものであつた。」しかし、平安朝後期の物語類は淡々しく、歌合もその頃の政治・宗教同様、「美的世界をつくり出す一つの儀式になつてゐた」。著者は終末感的末世の感情と推測する。

### 解説

「後鳥羽院以降」という最重要語を用いて、要点はまとめられているが、「文人詩人の志」と「芸能二面」と「終末感」の関係に飛躍がある。芸能二面は後白河天皇への言及部分である。こういったテキスト自身の晦渋さが要約を困難にしている。後鳥羽院自身を新古今集の編者にとらえるだけの文学史ではないところに難しさがある。その上この章は後鳥羽院を語るのではなくて、平安末期を中心にそえている。これは要約者よりも保田本人に飛躍があるといつてよい。

要約文の重要語のうち「歌合」「物語」が自動索引に現れた。

### 索引語 11. 文学の道 (15)

歌	21	西行	7	古	5
<u>歌合</u>	<u>17</u>	朝廷	7	作品	5
時代	12	文明	7	詩人	5
<u>源氏</u>	<u>11</u>	<u>あはれ</u>	<u>6</u>	女性	5
私	11	<u>物語</u>	<u>6</u>	小説	5
美	11			色	5
文学	10	<b>参考 (頻度 5)</b>		奈良	5
<u>古今集</u>	<u>9</u>	ことば	5	法皇	5
志	8	儀式	5	万葉集	5
日本	8	興味	5		

## 十二. 新古今和歌集

### 要約

後白河院，後鳥羽院とつづく御代で，後白河院の偉業を「個々の人間の意識や根性や執念などといふものを，ものの数とせぬ，民族本有の雄渾な文明の意志」とし，後鳥羽院については，そのなみなみならぬ院の勅撰集への思いを詳述し，その中で著者は，自身の文人としての生成の信念を述べ，「日本の文学史は，日本の文人にとっては，生命の本源となるものであり，創造の原因である」とした。

### 解説

要約には後白河院，後鳥羽院，保田の三者が抽出され，各人は新古今前史，新古今，後世の解釈者として扱われている。後白河院と，続く後鳥羽院を並記して要約しているところに，人の要約の捨てがたいものがある。しかし要約には「院の勅撰集への思い」以外には章題「新古今」の言葉が現れていないので，多少の不明瞭さを残す。

要約文の重要語のうち「後鳥羽院」「後白河院」が自動索引に現れている。

その他「新古今」「定家」「芭蕉」「実朝」「俊成」などは要約には現れないが、索引には比較的高頻度で現れている。

### 索引語 12. 新古今和歌集 (17)

歌	24	上皇	6	<u>俊成</u>	5
文明	9	<u>芭蕉</u>	6	信念	5
<u>後鳥羽院</u>	18	理	6	心	5
<u>新古今</u>	17	歴史	6	深刻	5
日本	15			神	5
思ひ	11	<b>参考 (頻度 5)</b>		盛儀	5
時代	11	あはれ	5	撰者	5
<u>定家</u>	11	いのち	5	代	5
志	10	鎌倉	5	朝廷	5
私	10	<u>後白河院</u>	5	文学史	5
ことば	9	三山御幸	5	竟宴	5
文人	9	思想	5		
生成	7	<u>実朝</u>	5		

### 十三. 遠島御歌合

#### 要約

院政時代を越えると、志の文学をたのみとする隠遁詩人の時代に入る。著者は、彼らの志の維持の根源には「後鳥羽院に始るしきしまの道を忘れることは出来ない」という。隠岐遷幸後の御日常が、歌の世界だけのものだった中、遠島御歌合は後鳥羽院の「王者の堂々の大風懐と、その道に対する不拔不動の信と誠があふれてゐる」とする。院崩御後、日本の文学の歴史の大筋は一応打ち切られ、保元平治平家物語などの出る合戦時代に入る。

#### 解説

この要約はわかりやすくまとまっている。テキストには背景の歴史としての鎌倉幕府などにも言及があるが、この要約で十分である。テキスト章末には八

十番遠鳥御歌合その第一番判辞前書きがまるまる一頁引用されている。ここでの後鳥羽院の言葉や発想は現代人にも理解できるものがあり、保田が基調とする後鳥羽院のために「遠鳥御歌合」一章をもうけ、章末を院の言葉で飾ったのには感慨深いものがある。現代の文学観からは異質かもしれないが、保田が締めくくるのではなくて、後鳥羽院自身に語らせるという態度がわかりやすい。要約もこれに応じて、非常に明快である。

要約文の重要語は自動索引にはほとんど現れていない。「志 (135)」があるが、これは全体頻度の順位が14番目と頻出語に入るので、この章を特徴付けるものではない。しかし索引語そのものにも章を特徴付ける言葉がほとんどない。人名として「実朝」「長明」くらいである。この章では、要約文と自動索引との関連性がほとんど見られなかった。

#### 索引語 13. 遠鳥御歌合 (24)

文学	27	歌	10	儀式	7
日本	17	歴史	10	<u>志</u>	<u>7</u>
私	15	わが国	9	神話	7
心	15	詩人	8	<u>長明</u>	<u>7</u>
時代	12	<u>実朝</u>	<u>8</u>	ことば	6
思ひ	11	神	8	日本人	6
朝廷	11	発心	8	美	6
ころ	10	文明	8	理	6

#### 十四. しきしまのみち

##### 要約

日本文学の上にあった定家の志を風雅とすれば、それは「即ちすめ神のみちであり、それは朝廷の風儀として現はれる。」風雅を慕ふとは、朝廷の風儀なるみやびへの憧憬欣求であった。その「王朝文学をうすめて風雅を教へ、和歌の心をしきしまのみちとして宗教化し、俗耳に入り易くといた」連歌師たちが、正しい国語を国中に流布せねばと考えたのは「国語愛の運動基盤と、哀切な文

人の志のあらはれ」で、これを著者は心に銘じたいとする。

### 解 説

「すめ神のみち」「朝廷の風儀」「しきしまのみち」と三つの言葉の背景が理解されておれば、よくまとまった要約文といえる。しかしテキスト全体がこのような言葉の意味を読者に伝えるためにこそ書かれていると考えるならば、文学における要約の難しさは解決し難いものとも感じられる。別の要約としては、定家だけに絞る方法も考えられる。

要約文の重要語はほとんど自動索引に現れている。ただし、「連歌師」は欠けている。

### 索 引 語 14. しきしまのみち (29)

国	22	日本	10	意味	6
<u>定家</u>	<u>21</u>	旅	10	歌	6
<u>風雅</u>	<u>17</u>	和歌	10	観念	6
時代	16	文章	9	<u>国語</u>	<u>6</u>
心	14	わが国	8	信念	6
文芸	14	権力	8	<u>朝廷</u>	<u>6</u>
みち	13	思ひ	8	風景	6
志	12	ことば	7	文学	6
乱世	12	自然	7	文人	6
<u>しきしま</u>	<u>11</u>	文明	7		

## 十五. 古典のまなび

### 要 約

古典のまなびは、万葉集、古今集、源氏物語の学問が次々に行われ、文学作品が漢文のものから仮名のものへと変わっていく話から始まる。自国古典の学びには、文学の意志に通じた「わが遠世の古事を、わが身上の今と将来の、創造と生産の生活の上で知るべしとした、当然の思慮が」あり、この志には、「そのまま日本文学の実であり、また道であつた」「貫くの心得」が不可欠で

あるとした。

### 解 説

鎌倉時代の学問を扱った章である。要約文は「万葉集，古今集，源氏物語の学問」で章の主題が提起され，それは遠世の古事を今と将来に考えることであるというように結論づけている。要約者が保田の考えに馴染み，要約がテキストを俯瞰するような傾向が現れてきている。

要約文の重要語のうち，自動索引には「万葉集」「学問」が現れている。索引語からみるとテキストに記された雰囲気は言葉の集まりとしてよく出ている。

### 索 引 語 15. 古典のまなび (23)

文学	17	志	9	いはれ	6
時代	15	<u>仙覚</u>	9	<u>源信</u>	6
<u>万葉集</u>	13	文章	8	心	6
朝廷	12	<u>学問</u>	7	<u>親行</u>	6
文明	11	<u>研究</u>	7	日本	6
<u>鎌倉</u>	10	伝へ	7	無常観	6
<u>古典</u>	10	都	7	和讃	6
<u>京都</u>	9	幕府	7		

## 十六. 南朝の文学

### 要 約

南北朝時代の代表作，「神皇正統記」に始まるこの章は，その著者親房卿について，又作品自体を古今序源氏物語芭蕉の文等と比較，解説していく。そして，武家の時代を久しく一貫，明治維新にまでつながる宋学をうけ入れた清潔な気質の発生を伝え，「創造の永遠の本願や，悠久を貫く悲願の動くところのことばと声，それが文学であり又詩である」とした。後半は「新葉集」など和歌集について，室町將軍達の勅撰集への執着を表した。

### 解 説

序章での保田の親房への深い言及からみて，テキスト十六章での要約を「神

皇正統記」に焦点を当てたのは妥当である。後半「勅撰集への執着」を一つの概念として抽出したことも当たっている。この要約は的確なものである。

要約文での重要語は自動索引に現れている。南朝を扱う章におけるこれらの索引語の高頻度はテキスト、要約、索引語がバランスよくまとまった好例といえる。ただし「宋学」が索引語には欠けている。

#### 索引語 16. 南朝の文学 (25)

文章	22	わが国	8	源氏物語	6
文学	21	真実	8	<u>後醍醐天皇</u>	6
時代	18	説	8	思ひ	6
<u>親房卿</u>	13	撰集	8	心	6
<u>太平記</u>	13	まこと	7	<u>勅撰集</u>	6
歌	12	<u>神皇正統記</u>	7	日本	6
作者	12	和歌	7	文学史	6
思想	9	いのち	6		
<u>新葉集</u>	9	宮中	6		

### 十七. 乱世の態度

#### 要約

乱世の態度では、まず平家物語と太平記を比較しながら見ていき、「平家物語が日本の民衆の心情を醸成したとすれば、太平記は日本の文人の志を形成し、それを激化した」とする。同時代に他にも文芸作品は登場するが、「日本の村里の民衆の間で年中行事が整頓され、神事芸能が固定化し、あるひは遊芸が富裕社会から始つて、漸次下降して一般の風流化」したのは、この室町時代であった。

#### 解説

テキストの時代は室町ならびに戦国時代である。太平記、謡曲、世阿弥、茶道などが中心に描かれている。要約文での平家物語は、テキストでは太平記を主とした中で従として取り上げられている。後半の引用はテキストでの主題で



あるが、室町時代の個々の文芸よりも人々の生活の姿がこの章には記されている。風雅が堂上から地下<sup>デゲ</sup>へ浸透した時代であった。章名から考えて要約文は妥当である。

要約文での重要語は自動索引に現れた。しかしテキストに書かれた神話と皇室と民衆のくらしの関係は、索引語には {くらし, 民衆, 生活, 態度} などの一般語としてしか現れていない。

#### 索引語 17. 乱世の態度 (23)

時代	23	くらし	10	生活	7
私	21	思想	10	天才	7
<u>太平記</u>	17	神話	10	文化	7
朝廷	13	<u>民衆</u>	9	文明	7
<u>平家物語</u>	12	<u>謡曲</u>	9	わが国	6
<u>芸能</u>	11	思ひ	8	<u>態度</u>	6
日本	11	影響	7	文芸	6
文学	11	世界	7		

#### 十八. 乱世の文人

##### 要約

その題名通り文学史観の上でいう「乱世の文士は、その運命や終局を問はず、気迫に於て人品に於て、近代の尺度で測るべきでない」という著者の評論の前提に基づき、宗祇・紹巴・貞徳らの文人達について語られ、又貞室の「かたこと」を示し「美しい王朝文芸を俗耳にも入れよう」とし、「紊れたことばを正す」目的に著述された「その記述の心持は最高の文学の美しさである」とした。

##### 解説

テキストの時代は戦国から桃山時代である。古今伝授、連歌、狂歌、俳諧について詳しい。細川幽齋への評価は高くはない。要約文では貞室への言及が後半を占める。貞室は国語学への貢献を高く評価されている。宗祇らがどう語られているかは紙数制限から省かれ、貞室だけを国語愛の観点から要約している

ところに、人の要約の妙がある。テキスト章末に「かたこと」序文が一頁にわたり引用されていたことによる印象深さの故か。

要約文での重要語 {宗祇, 紹巴, 貞徳, 貞室} は自動索引に現れた。

#### 索引語 18. 乱世の文人 (27)

<u>貞徳</u>	21	乱世	10	<u>幽斎</u>	7
<u>宗祇</u>	17	文学	9	歴史	7
時代	16	<u>連歌</u>	9	観念	6
<u>狂歌</u>	12	考へ方	7	思想	6
文芸	12	国語	7	<u>死</u>	6
<u>紹巴</u>	11	書	7	<u>宗鑑</u>	6
俳諧	11	伝へ	7	心	6
文明	11	<u>伝授</u>	7	<u>貞室</u>	6
文人	10	都	7	美	6

#### 十九. 深層の文学

##### 要約

「その思想や議論よりも、第一義に風懐志操に於て卓越した人々であつた」近世の著名な学者達を紹介、そこから「その状況自体が廣大無辺な世界にある」古の神道の自然 {オノヅカラ} に於ては、「殆ど世上に無縁のところ、その文学と創造精神は成り立ち、生成される」。「わが国の文学はここ以外になく、文人の志はこれを離れて成り立たない」と断言する。又鎖国に影響された精神の文明も言及した。

##### 解説

テキストは藤原惺窩、後水尾天皇、烏丸光広ら江戸時代前半について書かれている。光広作といわれる「竹斎物語」「仁勢物語」などへの言及が興味深い。要約文にはこれらの雰囲気が出ていない。抽象化が過ぎたとも言えよう。また要約文後半の鎖国への言及は、「深層」という章名との関わりも深く、もう少し展開が必要だった。要約文が個別の事項を捨て去り、一般化を計る傾向は

テキストへの習熟とともにあるように見受けられる。

要約文に現れた重要語は自動索引の高頻度語にはない。

#### 索引語 19. 深層の文学 (20)

文学	17	態度	8	志	6
時代	16	近代	7	朱舜水	6
惺窩	11	根底	7	日本	6
文人	10	省庵	7	判断	6
近世	9	繁荣	7	文章	6
いはれ	8	文明	7	歴史	6
精神	8	光広	6		

## 二十. 国学の恢弘

### 要約

水戸光圀, 契沖, 芭蕉等「国史上無双と評すべき人々が多数より集り, しかもその創造力は, 何時でも暴発する如き状態をつづけた時代」, 「元禄時代を頂上とする前後の大きい特長の一つは」, 「思ひも様子も極めて沈着にて, 事理を窮めるといふ形の」「国家自覚の意識」であった。著者は「わが国の道の本姿は, 風雅にあらはれるといふ事実認定」が行われるとそれは, 「道德の学となり, 国家や政治の本質論ともなり, 美観の竟極」でもあるとした。

### 解説

要約者は国学というものを元禄時代そのものの時代相に求めている。テキストでは, 冷静な「国家意識の自覚」とは吉田神道に比べて記されていた。後の二十一章でもそうだが, 列伝風のテキストは人にとって要約が難しい。実際のテキストでは, 芭蕉に焦点が合わせてあるが, 他のたとえば大津の曲翠などの解説も興味深く, これらを併せて要約するのは至難である。

要約文での重要語は「水戸光圀」以外は自動索引に現れている。索引語からみるとテキストの重要語が多数高頻度を現している。

#### 索引語 20. 国学の恢弘 (25)

<u>芭蕉</u>	40	<u>俳諧</u>	10	志	7
文学	15	日本	9	私	7
<u>契沖</u>	12	文明	9	生命	7
<u>談林</u>	12	江戸	8	いはれ	6
文芸	12	思ひ	8	<u>去来</u>	6
<u>季吟</u>	10	<u>西鶴</u>	8	<u>国学</u>	6
<u>元禄</u>	10	文章	8	<u>宗因</u>	6
時代	10	文人	8		
心	10	歴史	8		

## 二十一. 文芸の新しさ

### 要 約

「新しい時代の発動は、古典への回帰から始つた」という言葉に始るこの章は、その東下で江戸文壇が始めて形成された賀茂真淵、「江戸に於て直截激越に尊皇斥覇の論をなした」山縣大貳、「古の文明を顕彰されつつ、日本文学の美観の真髓をあまねく教へ」、「古事記伝」を著した本居宣長、真淵門下で国語文法の研究に心を傾け、「雨月物語」を表した上田秋成、その他蕪村、蝶夢など多数の文人の出生からその功績までを記した。

### 解 説

要約文の言うようにテキストは列伝風になっている。各段落の冒頭で人名をあげるものが多い。「賀茂真淵は遠州岡部に生れ」「真淵が所謂万葉調の」「宣長翁には万葉調といふ」「山縣大貳の処刑」「八代将軍吉宗が」「宣長翁は伊勢松阪の」「宣長が真淵に会つたのは」「宣長が源氏物語の論に」「宣長が黄老の思想と」「鹿持雅澄は土佐の人」「蕪村と秋成と並べて思ふと」「蕪村を芭蕉にくらべるのは酷」「私は秋成の小品に」「秋成の生母は」「蕪村は高邁な詩人」「蕪村は享保元年大阪に」「早野巴人が京都へ」「蝶夢が五升庵を」「蝶夢の出生来歴も定かでない」。人が要約をすると俯瞰する傾向がここでも現れている。

要約文での重要語は自動索引においてほぼ網羅された。宣長(25)は飛び抜

けているが、全体での頻度38からみるとほぼ宣長の66%がこの章で語られていることになる。

### 索引語 21. 文芸の新しさ (24)

<u>宣長</u>	25	<u>真淵</u>	9	あはれ	6
文学	17	説	9	まこと	6
<u>蕪村</u>	15	<u>縣門</u>	9	わが国	6
<u>蝶夢</u>	13	思想	8	絵画	6
江戸	11	時代	8	志	6
<u>秋成</u>	10	俳諧	8	世界	6
心	10	京都	7	生活	6
文章	10	私	7	芭蕉	6

## 二十二. 志士の文学

### 要約

宣長の教えた「漢ごころを排する文学観」が「前代の維新の志士の間では、身に即して濃厚に生きてゐた」ことのわかる詩歌文芸を、明治以降三代の文学と比較することが日本の文学史を打ち立てる上で最大と著者は考える。又元禄後「自然の時代へ、文学の頂上は移つてゐた」ことを維新第一の大歌人として「庶民のくらしのこころを身につけ、それがそのまま精神の高邁さに通じてゐた」伴林光平を用いて評す。

### 解説

要約文は国学と幕末志士とをまとめ収斂させたところに伴林光平をおいている。テキストでもこの章でのもっとも印象深いところが光平に言及したところである。しかし、「自然<sup>オノヅカラ</sup>の時代へ、文学の頂上は移つてゐた」という引用は理解をテキストに頼らざるをえない。オノヅカラとはここでは草莽の詩人が元禄以降出てきたということで、彼らの文芸が頂点を占めたと解ける。光平については保田の『評註南山踏雲録』もあり、彼の志士文学は光平につきるとの感をうける。

要約文中の重要語として {光平, 志士, 維新} が自動索引に現れている。一方索引語からみてこれを補完するものとして {天忠組, 死, 乾十郎} をあげることができる。なお, 天誅ではなく天忠を, 光平にならって保田は使用している。

次に特徴的な言葉として, 「死 (7)」はこれまで「四. 日本武尊 (9)」「五. 神を祭る文学 (6)」「十八. 乱世の文人 (6)」に高頻度で現れている。「死」は全体で63の頻度を持ち, これは人物で最大の芭蕉 (91) と作品で二番目 (一番目は万葉集 (110)) の源氏物語 (39) の丁度中間に位置する値である。一般語としての死のような言葉も, 伴林光平, 天忠組, 乾十郎といった語と組み合わせられて使われるときには意味が重く, その語の出現が特徴を持つ場合があることの証左であろう。

#### 索引語 22. 志士文学 (21)

文学	28	日本	9	まこと	6
歌	24	思ひ	8	<u>維新</u>	6
<u>光平</u>	21	風雅	8	学問	6
私	14	志	7	観念	6
<u>志士</u>	13	<u>死</u>	7	時代	6
文章	12	<u>十郎(乾十郎)</u>	7	存在	6
<u>天忠組</u>	10	書	7	和歌	6

### 二十三. 文明開化の超剋

#### 要約

この章では, 「近代」の文学について, 明治維新・日清日露戦争・大東亜戦争を軸に, この間を生きた文人達の動向と共にその思想や文芸の流れを解説していき, 「三十年代に開花した明治の文学は, 二つの戦争に前後から光りと誇りと自覚を与へたが, 底は悲愁のしらべだつた」と結論づけ, 戦争を越えることが文人に強いられた文明完遂の唯一の道だが, 「その日の浪漫家たちの心緒は, 二つの戦争を超剋することが出来なかつた」とした。

## 解 説

要約文は、ここで保田の晦渋さに直面している。まずテキスト自体が、平家物語や太平記に描かれた合戦やいくさとは異なる、合理的殺戮、無機的な殺人に象徴される「戦争」という言葉を頻繁に使用している。これをうけて要約文も「戦争」を軸に記されている。保田は、戦争が近代文明の象徴であり、これを超克することが文学の志であると言っている。しかし、それがどういうことであるかは、テキストを熟読しても明瞭にならず、要約文もそれを解決できない。思想というものを要約することの難しさである。

要約文での重要語は自動索引に現れている。索引語に現れた土井晩翠は、別途保田による解説もある。

## 索 引 語 23. 文明開化の超克 (36)

近代	32	歴史	11	思ひ	7
アジア	19	<u>戦争</u>	<u>10</u>	詩人	7
<u>文明開化</u>	<u>19</u>	独立	10	時代	7
日本	17	歌	9	勝利	7
<u>明治</u>	<u>17</u>	悲劇	9	伝統	7
文学	16	自覚	8	風雅	7
文芸	14	若者	8	<u>明治維新</u>	<u>7</u>
世界	12	新体詩	8	偉大	6
精神	12	生命	8	系譜	6
西洋	12	<u>晩翠</u>	<u>8</u>	権力	6
わが国	11	まこと	7	現象	6
考へ方	11	原理	7	思想	6

## 二十四. 日本の文学の未来

## 要 約

明治から昭和初期にかけての一連の文学事情・思想・主義を述べていく事で、著者は「文学」についてその生命・極致最高にあるもの・使命などを明らかに

する。そして戦後文学を考証し、「これらの戦後に出た小説の文学を頭に描く時、なげきつつも、憂ひつつも、ひそかに私はわが国民の創造力と構想力と、その発現とに、未来をかたく確信するのである」と未来への展望を語っている。

## 解 説

近代現代に入ると保田の用いる用語も現代人になじみのあるものが多く、要約文自体もずいぶん分かり易くなる。要約者のテキストに対する俯瞰の姿勢はより一層明確に現れている。しかし、保田自身が近現代文学にはほとんど興味を持っていなかった事実もあり、要約自体からみると特徴はない章という印象を与える。テキスト自体には近代小説を批判して、これらの作品内容は心理学か論理学か政治思想にまかせればよい、そんなのは文学と言えない、というような意味の激しい言葉も散見するが、そういう断片も要約文では高次の抽象化が計られている。

要約文での重要語は {小説, 明治} の二つが自動索引に現れているにすぎない。しかもこの二語は一般語であり、要約文や索引語において特徴的な言葉とはいえない。要約と抄録の違いが顕著に現れるところである。

## 索 引 語 24. 日本の文学の未来 (33)

文学	57	作者	10	プロレタリア	7
時代	24	文士	10	考へ方	7
<u>小説</u>	<u>20</u>	心	9	<u>自然主義</u>	<u>7</u>
思ひ	14	流行	9	書	7
私	14	歴史	9	人間	7
<u>明治</u>	<u>14</u>	現象	8	係	6
世界	13	<u>子規</u>	<u>8</u>	江戸	6
日本	13	芭蕉	8	国	6
作品	12	文化	8	新時代	6
俳句	11	文章	8	文芸	6
<u>文明開化</u>	<u>11</u>	ことば	7	和歌	6



## 全 体

### 要 約

神話の時代大和から、日本浪漫派の昭和初期まで、時代時代の文人達、又彼らの作り出した作品を紹介しながら、著者の「文人の志の系譜をたどりたい」という目的をもとに、神詠に始まる万葉集撰者の家持や古今集の貫之、後鳥羽院、定家、芭蕉等の志を明らかにしていく。また、他の国々と違い、わが民族神話において神々が肉体の血縁血統で人に直結しているという点から、日本武尊に現れた神と人の関係も文学に大きな影響を与えているとし、「神話がわが国の歴史を貫いてゐた」ことはゆるがせにできない事実であるとした。神話時代より、人々にとって天皇はまた神であった。それをもとに、著者は風雅、特に朝廷の風儀について重ねて語る。平安朝以降の長い間、朝廷の風儀なるみやびへの憧憬欣求は続いていたとし、著者は、そうした古の文学を尊敬すると言う。しかし、逆に近代文学以降の「西欧風観照法」に流された文学は痛烈に批判し、嘆いている。とはいえ、戦後文学から「想像力と構想力と、その発現とに、未来をかたく確信」してこの著を終わらせている。

### 解 説

要約者のテキストへの習熟度は全体要約において進んだ感が強い。この要約はほぼ完成されたものであり、解説を付加するまでもない。「文人の志の系譜をたどりたい」「神話がわが国の歴史を貫いてゐた」という二つの引用は要約者の保田への理解の深さが現れている。保田にとっての日本の文学史とは、文人詩人の志の系譜をたどることである、という点に結論がでていいる。そうしてその源は日本の神話であり、神話を引き継いだ形での朝廷の風儀に文学、美のすべてがある、保田はそのように記し続けたのである。要約者もまたその結論に達したようである。文学とは時間の経過によって受容されていくものであるから、このように理解の深さが変化していくのは自然な流れである。

全体要約に現れた重要語はほぼ自動索引に高頻度で現れている。217異なり語は一般的な図書巻末索引として妥当な量であり、索引語と全体要約との関係はこの水準で関係性が充分であると判定した。また、索引語から見て、著名な作

品や人物はほぼ含まれているので、今後はこのような自動索引の結果から全体要約を作るという方向性もあるのではないかと考える。

### 索引語 00. 全体 (217)

文学	388	説	69	権力	44
私	316	自然	67	作品	44
時代	301	意味	64	生活	44
歌	225	死	63	近世	42
日本	209	観念	61	詩歌	42
神	206	<u>風雅</u>	<u>61</u>	証	42
国	180	<u>風儀</u>	<u>61</u>	人の心	42
心	176	詩人	59	人間	42
歴史	168	日本人	59	方法	42
思ひ	164	生命	58	風景	41
ことば	158	都	58	語	40
わが国	144	明治	57	山	40
文明	138	くらし	56	<u>源氏物語</u>	<u>39</u>
<u>志</u>	<u>135</u>	古典	56	<u>定家</u>	<u>39</u>
美	129	しるし	55	<u>天皇</u>	<u>39</u>
文章	126	和歌	55	言葉	38
文芸	119	表現	53	<u>宣長</u>	<u>38</u>
<u>万葉集</u>	<u>110</u>	精神	52	美しさ	38
思想	107	態度	52	詩	37
<u>朝廷</u>	<u>104</u>	代	52	情	37
世界	94	ころ	50	悲劇	37
文人	92	感動	49	声	36
<u>芭蕉</u>	<u>91</u>	小説	49	存在	36
まこと	87	信	49	みち	35
古	86	文明開化	49	解釈	35
いはれ	85	政治	48	学者	35
近代	85	事実	47	感情	35
考へ方	85	流行	47	記録	35
伝へ	81	学問	46	<u>古事記</u>	<u>35</u>
物語	75	<u>民族</u>	<u>46</u>	<u>太平記</u>	<u>35</u>
文学史	75	無	46	文化	35
書	73	英雄	45	皇子	34
作者	72	中心	45	<u>古今集+古今序</u>	<u>34</u>
<u>神話</u>	<u>70</u>	あはれ	44	<u>貞徳</u>	<u>34</u>

俳諧	34	相	27	真実	23
大和	33	努力	27	説話	23
土地	33	批評	27	天	23
日本武尊	33	雰囲気	27	京	22
年	33	歌合	26	傾向	22
乱世	33	鎌倉	26	古人	22
貫之	32	気質	26	考証	22
後鳥羽院	32	契沖	26	国語	22
江戸	32	形成	26	子	22
自分	32	人心	26	批判	22
造形	32	日本文学	26	比較	22
民	32	判断	26	文士	22
旅	32	不思議	26	ちがひ	21
現象	31	偉大	25	家持	21
自身	31	意識	25	系譜	21
伝統	31	異質	25	光平	21
民衆	31	永遠	25	根源	21
理由	31	花	25	史実	21
いのち	30	心得	25	少女	21
元禄	30	奈良	25	信仰	21
象徴	30	理解	25	心情	21
理	30	しらべ	24	西洋	21
影響	29	御代	24	創造	21
興味	29	新古今	24	想像	21
自覚	29	神道	24	天上	21
むかし	28	第一義	24	維新	20
芸能	28	非常	24	国学	20
根底	28	アジア	23	振舞	20
事情	28	我国	23	親房卿	20
女性	28	気分	23	人物	20
伝承	28	儀式	23	水	20
発想	28	御製	23	成立	20
幕府	28	古今集	23	先人	20
流れ	28	注：別に「古今		大事	20
なつかし	27	序」が11ある。		著作	20
関係	27	今生	23	武士	20
京都	27	実朝	23	蕪村	20
情緒	27	重大	23	平家物語	20